

## P-021

## 育児参加している父親の産後1カ月での育児に対する思い

真川 翠<sup>1)</sup>、柳瀬 幸子<sup>1)</sup>、宮崎つた子<sup>2)</sup><sup>1)</sup>ヤナセクリニック、<sup>2)</sup>三重県立看護大学 看護学部

## 【はじめに】

父親の育児休業取得の促進に伴い、父親の育児参加が増えてきているが、産後早期の父親に関する研究は十分に行われていないのが現状である。

## 【目的】

育児参加している父親の産後1カ月での育児に対する思いを明らかにする。

## 【方法】

2024年3月～6月、当院出産で産後1カ月健診時に、同意を得られた父親を対象とし、産後1カ月までの育児に対する思いについて半構成的面接を行った。なお、本研究は所属機関の承諾(M24-1-3)を得て行った。

## 【結果】

対象は9名、年齢は20～30歳代、子どもの人数は、1人は5名、2人が4名、10日以上育児休暇を取得した者は5名であった。分析の結果、93のコードから、31の【サブカテゴリー】が生成され、7の【カテゴリー】が抽出された。今回、育児休暇を取得している父親も多く、【育児や家事に目を向けられる心や時間の余裕】ができた分、【育休終了後の生活への不安】もみられた。育児に参加することで【妻の育児の大変さを実感できよかったです】など【育児経験を積むことの重要性】を感じていた。【夫婦で分担しながら協力して育児を行う良さ】を感じる一方で、【妻に頼って欲しい】【妻に気を遣い思つた育児を行えない】など【夫婦で育児を行うにあたっての良好なコミュニケーションの必要性】が明らかになった。第1子の父親の特有な思いとして、【ネットによる育児情報過多】や【育児情報収集方法がない】ことによる【育児情報不足による育児不安】や【父性を獲得できないことへの不安】を感じていた。他の家族との関係では【上の子がいる父親ならではの悩みや不安】や【妻の父母との関わりに対する思い】が明らかになった。

## 【考察】

産後早期に夫婦で育児をすることは、母親の育児負担の軽減や父親役割の獲得、夫婦関係にも良い影響があることが示唆された。夫婦で協力して育児を行うためには、お互いの認識について理解し共有するコミュニケーションが必要と言われており、妊娠期から夫婦に対して指導を行い、妊娠中から育児に向け夫婦で話し合えるように支援していく必要があると思われる。【育児情報不足による育児不安】、【上の子に対しての関わり方の悩み】、【妻の父母の言動への苛立ちや葛藤】など、様々な思いや不安を抱え育児をしている。医療者は父親の思いを理解し、今後は父親に対しても、入院中の育児指導、1カ月健診時の聞き取り、産後の育児クラスなど、直接的な支援が必要になると考える。

## P-022

## 幼児をもつ父親の育児ストレスに関する影響要因:ソーシャルサポートに焦点を当てて

山田 万結

武藏野赤十字病院 看護部

**【目的】** 幼児をもつ父親の育児ストレスに誰からのどのようなソーシャルサポートがどの程度影響を及ぼすのかを明らかにする。**【方法】** 研究デザインは無記名自記式のWebアンケート調査を用いた関連検証研究・要因探索研究である。対象は現在2歳から6歳の児と同居している18歳以上の父親とし、データ収集期間は2023年9月から同年10月で、関東圏内の保育園・幼稚園に研究協力を依頼した。測定用具は、基本属性である子どもの特性にはSDQ ( $\alpha=.85$ )、父親の育児ストレスにはPSI-SF ( $\alpha=.85$ )、ソーシャルサポートにはSSPS-P ( $\alpha=.91$ ) を使用した。データ分析方法は、記述統計にてデータの展開を確認し、正規性の検定を行った後、仮説に従いSpearmanの順位相関係数、Mann-WhitneyのU検定、Kruskal-WallisのH検定を用いて検証を行った。その上で、父親の育児ストレスと関連が見られた基本属性・ソーシャルサポートについて、重回帰分析の強制投入法及びステップワイズ法で分析を行った。検定統計ソフトはIBM SPSS Statistics ver29を使用し、有意水準は5%とした。本研究は日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会の承認を得た上で実施した。**【結果】** 回収した175名からの回答のうち159件を分析の対象とした。父親の育児ストレスと関連していた要因を、父親の育児ストレス全体と育児ストレスにおける子ども又は親の側面の3項目との重回帰分析にかけた結果、育児ストレス全体においては「父親の健康状態」( $p=.003$ ,  $\beta=-.461$ )、「配偶者からの評価的サポート」( $p=.003$ ,  $\beta=-.457$ )、子どもの側面においては「行為の問題(2歳から4歳)」( $p=.021$ ,  $\beta=.401$ )、「父親の健康状態」( $p=.028$ ,  $\beta=.379$ )、親の側面においては「父親の健康状態」( $p=.006$ ,  $\beta=-.303$ )、「友人・知人からの情緒的サポート」( $p=.007$ ,  $\beta=-.292$ )、「配偶者からの評価的サポート」( $p=.013$ ,  $\beta=-.277$ )が影響を及ぼしていた。また、「父親の健康状態」はソーシャルサポートとの関連も認められた。**【考察】** 父親の育児ストレスの軽減には、パートナーからの肯定的な評価や、育児に関する悩みを分かち合える友人・知人の存在が有効であることが推察された。また、自我や生活行動の発達期にある子どもをもつ父親が、子どもの行為についての悩みを相談できる場を提供することの必要性も示唆された。そして、父親が必要なソーシャルサポートを受け、健康に育児を行える環境を整備することが急務であると推察された。